

お忙しくても、約2分間で読めます

山内公認会計士事務所

ハートフル・ワード (心からの言葉)

TEL 098-868-6895
FAX 098-863-1495

経営者への活きた言葉

会社は個人の技術を発揮して実務に結びつける場所 崎谷 文雄（ローツェ創業者、現取締役相談役）

1. 私が1985年に創業したローツェが主力とする半導体ウェハー搬送装置は今、注文に生産が追いつかない状況です。2023年2月期連結売上高は前年同期に比べて4割以上、純利益は7割以上増えて、20%以上の営業利益率も維持する見込みです。グループ会社を含めて従業員4000人ほどですが、本社の約230人の社員の平均年収は1100万円を超えています。
2. 高収益を支える「世の中になくものをつくる」という方針は、創業時からのものです。広島県福山市の田んぼのなかにプレハブの工場を建て、社員6人で立ち上げました。会社は個人の技術を発揮して実務に結びつける場所であると同時に、個人の技術を向上させて将来の夢を実現させるところだと考えています。
3. どんなに優れた技術を持っていても、営業力や宣伝費で勝る大手メーカーが追いかけてきたら、のみ込まれてしまう。そこで考えたのが「ニュースになる革新的製品をつくる」方針です。世界的なオンリーワン製品を開発すれば、新聞や専門誌が取り上げてくれて、ただで宣伝できる。ローツェでは社員の技術力や専門性を高めるための支援は惜しまず、スキルアップのための資金援助や報奨金を充実させてきました。

(参考:「日経ビジネス」2023年1月16日号)

経営者のための社会学

「貧困ニッポン」と化した「超・階級社会」

1. かつて存在した分厚い中間層は総崩れとなり、格差が急拡大。日本は「一億総下流社会」へと変貌を遂げた。そして新型コロナウイルスの感染拡大やインフレが引き金となって、拡大した格差が完全に固定化する「超・階級社会」を迎えようとしている。「超・階級社会」を招くのは、「低成長」「低賃金」「弱過ぎる円」「貿易赤字の常態化」の四重苦だ。
2. バブル崩壊以降、低成長にあえぐ日本では、企業の従業員の給与は伸びず、先進国で最下位、発展途上国並の低賃金に陥った。長年続いた低成長と低賃金は、日本にデフレマインドを植え付けた。かつてジャパン・アズ・ナンバーワンと称された日本は、いまや「貧困ニッポン」と化した。下克上が一切起り得ない理不尽な「超・階級社会」が、追っている。

(参考:「週刊ダイヤモンド」2023年1月21日号)

新規成長分野

企業成長させるビジネスモデル

井上 達彦（早稲田大学商学学術院教授）

1. 第一線で活躍している機関投資家によれば、日本企業はものづくりの意識は高くても、ビジネスモデルへの意識が十分でないという。キーワードはビジネスモデルにあるのかもしれない。ビジネスモデルづくりが上手で投資家から期待される企業は、ビジネスモデルの組み合わせ、すなわちビジネスモデルのポートフォリオが上手である。優れたポートフォリオには「リユース型」と「リサイクル型」の2つがある。
2. 一般に、リユースとは再利用のことを指す。一度使ったものを廃棄しないで何度も使うことだ。もともとの構造や形状を維持したまま、何度も異なる市場に使い回すということの意味する。リサイクルとは、廃棄物から資源を取り出して利用すること。ビジネスモデルで言えば、そこで使われた経営資源を要素レベルで、もう一度組み直すことになる。要素を融合させるという意味で「融業」と言い表せそうだ。

(参考:「週刊東洋経済」2023年2月4日号)

古典に学ぶ

さまざまな面から物事を捉えてみる

1. 恵眼を持って、陶器の茶碗を見てみましょう。陶土でできた器だと見ることもできれば、いずれ割れるから、諸行無常の象徴だと捉えることもできます。あるいは、たんなる空っぽの入れ物だと見る人もいるでしょう。
2. どの見方も間違いではなく、「真理」です。このように物事を多角的に捉えると、それまで気づかなかった本質が見えてきます。

(参考:名取芳彦監修「空海 道を照らす言葉」:河出書房新社)